

杜甫の五言律詩「春夜喜雨」

報告：花岡風子

今日のお題は杜甫の五言律詩「春夜喜雨」(春夜に雨を喜ぶ)でした。

杜甫の人生については、これまでも講座で何度か伺っては来ましたが、今回改めて色々お話を聞くうちに、杜甫という人は「ピント外れと思えるくらいの大望を抱いた、タイミングの悪い、偉大なるマジメ人間なのでは」と思ってしまいました。何せ、杜甫は唐の玄宗皇帝の側近になり、詩の力でもって皇帝を導き、善政を施させて「君を堯舜ぎょうしゆんの上に致す¹⁾」という壮大な野望を抱いていたのですから。つまりは玄宗皇帝を補佐するナンバー2になりたかったというわけです。

過去にも周公や范蠡はんれい、諸葛孔明など輝かしい名ナンバー2を生んできた中国で、ナンバー2への憧れ、というのも分かりますが、杜甫は政治家として優れていたかと言うと、やはり詩人以外の何者でもなかったと言わざるを得ません。しかもタイミングが悪いことに、玄宗皇帝を天子と仰ぐには、時が10年遅過ぎたようです。な

ぜなら、杜甫が仕官を志し、都に着いた頃には、玄宗皇帝は既に楊貴妃にメロメロ。政治権力は玄宗皇帝自身ではなく、事実上側近たちの手に渡っていたのです。

一方、11歳年上の李白は幸運なことに玄宗皇帝の絶頂期に宮廷詩人として仕えました。しかし、余りにも気ままな振る舞いが多かったため、側近たちに妬まれ、追放に追い込まれます。玄宗皇帝は李白に多額の金品を持たせたうえ、泣く泣く李白を手放したそうです。

その李白の放浪中に杜甫は李白と一時期親交を結びます。その後、杜甫は都に行きますが、まともな仕官の道を得られぬまま、不運なことに程なく安祿山の乱に遭遇し、玄宗皇帝は失脚。次に即位した息子の肅宗に仕えようと着の身着のまま、行在所に馳せ参じたりして、やっと初めて左拾遺という、低いながらも皇帝に直言できる官位を得ます。ところが肅宗は杜甫が考えたような人物ではなかったようです。玄宗皇帝のように芸術

を理解するどころか、極めて実務的な君主でした。肅宗としては、玄宗のせいで破壊された王朝の秩序を取り戻すのが精一杯で、杜甫の期待に応える余裕など無かったのかもしれない。

結局のところ、杜甫は左遷の憂き目に遭います。その後、家族を連れて長い長い流浪の旅に出て、苦難の末に、漸く落ち着いた先が蜀の地、今の四川省の成都でした。そこで古い友人たちに出会い、草堂を建ててもらったりして、しばし安住の地を得ます。その草堂で書いた詩が今回の「春夜喜雨」なのです。

この時期に書かれた杜甫の作品は、

chūn yè xǐ yǔ
春夜喜雨dù fǔ
杜甫hǎo yǔ zhī shí jié
好雨知时节dāng chūn nǎi fā shēng
当春乃发生suí fēng qiǎn rù yè
随风潜入夜rùn wù xì wú shēng
润物细无声yè jìng yún jù hēi
夜径云俱黑jiāng chuán huǒ dú míng
江船火独明xiǎo kàn hóng shī chù
晓看红湿处huā zhòng jīn guān chéng²⁾
花重锦官城しゅん や
春夜に雨を喜ぶ

杜甫

こう じう
好雨时节を知りすなわ
春に当たって乃ち発生すひそ
風に随いて潜かに夜に入りうるお こま こえ
物を潤し細やかにして声無しや けい く も と も く ら
夜径雲俱に黒くこう せん ひ ひと あ
江船火独り明かしあかつき くれないうるお
晓に看る紅湿う処おも きんかんじょう
花は重し錦官城

落ち着いた心境で自然の恵みを詠んだものが多い、という特徴があります。一方で、この詩には当時の杜甫の複雑な心境が行間に滲み出ているようでもあり、そのことが作品に一層の深みを与えています。

これは五言律詩です。律詩は八句で構成されます。この詩の前半の四句はすべて雨を擬人化した奇抜な始まりです。後半四句は杜甫の目を通して見た世界です。いつのまにか前半と後半で主体が入れ替わっているのです。前半が聴覚、後半が視覚と見ることもできます。しかも全体に緩やかな時間の推移が見られます。暗から明へ、後半の色彩表現も鮮やかです。

偶数句の末尾で韻を踏む。平声で韻を踏み、仄声で韻を外す。典型的な律詩スタイルです。韻字は生、声、明、城。何れも平声「庚」音に属します。平仄の方式は、最初の句の二字目が仄声で始まる仄起式をとっています。形式的にも内容的にも完成された美しさを持つ、数ある杜甫の名作の中でも、絶品の一つといえます。

今回の漢詩の会では、後半はひたすら朗読の練習をしましたが、これを杜甫の心情を滲ませて読むのは難しいものです。「読み方一つで全く詩の雰囲気が変わってしまうね」植田先生はそう呟きながら、一行ずつ味わい深いお手本を示して下さいました。「ところで、人生をうまく渡った人はいい詩人になれない。かつて権力者だった王安石も失敗して故郷に帰った時の詩が良いんだよ。権力の絶頂にある時は良い詩を書けない。だから安倍さんには書けないだろうねえ、安倍仲麻呂には書いても」植田先生のジョークに一同深く頷きました。

だいたい芸術家というのは、世渡りは滅法下手で、不遇な人が多く、世間的には変人だったりしますね。でも、とことん自らの魂の内面を抉り出す、その直向きの勇氣と純粋さが常人を越えているからこそ、それが言葉となって、何千年も国境

を超えて人の心を打ち続ける所以なのでしょう。

この「春夜喜雨」の現代語版を大胆にも風子バージョンで書いてみました。



なんて素敵なお雨なんだ。
春のちょうど良い頃に、しかも
皆が寝静まった夜に風とともに、
密かにやって来るとはね。
世界に潤いを与えて、しかもその存在を
消したかのように、音もなく、
(まるで、あの人のようではないか。)

野道も雲も闇にかき消され、
川に浮かぶ船の灯りだけが、
暗がりの中で
ポツと明るく目に入る。
朝靄の中に、赤く潤う此処かして
雨に濡れそぼった錦官城の花が
いかにも重そうだ。

(ああ、我一人、憧れしかの孔明が活躍せし錦官城を想う。自分の人生は結局、あこがれのナンバー2にはなれなかったけれど)



華々しい世界の裏側で打ち捨てられたかのような、素朴な人間らしさに深い味わいを感じる今日この頃です。

地味なのに壮絶、且つ、ちっぽけであると同時に壮大でもある。人間の存在そのものに通じるものがあるからなのでしょう。

■註

- 1) **君を堯舜の上に致す**：原文は「君致堯舜上」。杜甫の自作詩「奉贈韋左丞丈二十二韻」(韋左丞丈に奉り贈る二十二韻)より。
- 2) **錦官城**：成都の別名。三国時代、四川産の錦織物を管理する役所があったのでこのように呼ばれる。錦は蜀王朝の主要な財源でもあった。